

令和7年度
横山利弘先生を囲む道徳教育東京勉強会（報告）

杉並区立天沼中学校

池田 和幸

第1回勉強会 5月20日（土）参加者21人（Zoomと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物教材「闇の中の炎」（文科省中学校道徳読み物資料集）を活用した存在の建設につながる授業づくり

【進め方】（第2回以降も同様）

- ① 全体会（参加者自己紹介、道徳教育に関わる質問等と横山先生による解説）
- ② グループに分かれた資料検討。
- ③ 全体協議会（グループ討議の報告と横山先生による指導・助言他）

【全体会及び協議会より】

○本教材の内容項目について

→遵法精神、公德心の内容項目で掲載している教材であるが、自主、自律、自由と責任の内容項目と捉えた方がよいのではないか。自主、自律は道徳教育を支える価値であるので、全ての道徳教育の教材に関連する部分がある。本教材においては、主人公が自分自身で気づき、間に合わないとしても構わないと書き直していく部分に着目することが大切。

○「闇の中の炎」で考える視点

→著作権という法令と関係する部分で考えていくと、この話における著作権法に抵触するかもしれない部分については、なんとも言えない部分がある。それよりも自分自身の問題として、自分が許せないと思ったことについて、主人公が変わっていかうとする姿に寄り添っていくことは、まさに「存在の建設」であり、自分を創りあげていくことにつながる。どんな生き方をしたいのかということにしっかりと焦点を当てて、考えさせていく発問が重要である。

第2回勉強会 7月13日（土）参加者22人（Zoomと対面によるハイブリット型勉強会）

【課題】 読み物教材「銀色のシャープペンシル」（文部省道徳教育推進資料第3集）を活用した存在の建設につながる授業づくり

【全体会及び協議会より】

○よりよく生きる喜びの内容項目について

→困ったときの3-1(3)と言われていて、過去に様々な教材で扱われている内容項目である。この教材についても、自分自身を偽る弱さや醜さとしてしっかりと出会わせていくことで、そこを乗り越えようとする気高さや人間の素晴らしさについて考えを深めることができる。これまでの道徳の教材はどちらかと言うと、自分の道徳上問題に出会い、そこを乗り越え、克服していくというパターンが多い。そう考えるとどの教材もよりよく生きる喜びにつながると言えるが、しっかりと弱さ、醜さに着目させることが重要である。

○「銀色のシャープペンシル」を考える視点

→銀色のシャープペンシルは、これまで様々な実践が行われてきている。それらの実践を参考にしていくことは大切であるが、存在の建設という視点で考えたとき、主人公が内なる良心の

声を聞いて自分を振り返ることができた場面に着目させ、このままの自分ではいけない、新しい自分の姿を創っていこうとする様子について、生徒に考えさせていくことが大切。主人公がこの後謝りに行ったかどうか大切ではなく、このままではいけないと思えたところを大切に捉えていく必要がある。

第3回勉強会 9月14日(土) 参加者19人 (Zoom と対面によるハイブリッド型勉強会)

【課題】 読み物資料「ぶれない心」(あかつき教育図書)を活用した存在の建設につながる授業づくり

【全体会及び協議会より】

○向上心、個性の伸長について

→個性というのは、一人一人の独自性のことであり、人格の総体として捉えることができる。その人がもっているよりよい部分を伸ばして、より輝かせることも大切なことであるが、短所と捉えているところも、見方や考え方を変えていくと、長所として大切な個性につながっていく。一人一人の存在を建設していくことは、個性を伸ばしていくともいえる。自分の存在の設計図は、自分自身でしか描けない。個性を大切にすることはそこに意義がある。

○「ぶれない心」を考える視点

→松井秀喜という人を知っている生徒はかなり減ってきているが、打者としてイチローと同時期に大リーグで活躍したレジェンドであり、人格的にも賞賛されることの多い人物である。「努力できることが才能である」という言葉を父から与えられ、それを小学校3年生から自分の座右の銘のようにして過ごし、それを実践してきたすごみを感じられる教材である。一歩間違えると偉人の教材は、自分自身から離れて考えてしまいがちだが、松井秀喜という人も我々と同じように挫折や悔しい思いをしてきている中で、それを乗り越えているということに気づかせていく発問を取り入れながら考えさせていく必要がある。

第4回勉強会 11月18日(土) 参加者101人 (Zoom と対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物教材「キミばあちゃんの椿」(私たちの道徳)を活用した存在の建設につながる授業づくり

【ワークショップ及び講演より】

○「キミばあちゃんの椿」を考える視点

→広瀬淡窓の凄さについて、万善簿をつけ続けたという部分など、しっかりと読み込めると良い。重複な関係性で描かれており、広瀬淡窓の生き方を助言として、裕介が自覚するという形で描かれている。本教材が作成された時期は、東日本大震災直後の時期であり、人が大勢亡くなった時期に作成された教材で、人が直接亡くなる表現を使わずに作成された生命の尊さに関する教材である。横山先生の思いがそこには多く込められており、中学生にしっかり考えさせていくのは難しい教材であるが、広瀬淡窓の生き様にしっかり焦点を当てて、考えさせてほしい。

○主体的・対話的で深い学びについて

→道徳は存在の建設である。その建設は誰が行うのか、設計図は誰が描くのか、その答えは全て自分にある。つまり主体である。主体的ということは、自分自身が考え、決めていくこと、学習者が主体となる学習は教師にやらされる学習ではなく、自分から行う学習、アクティブラーニングという言葉が用いられたが、能動的な学習という意味となる。自分が主体となって学習することは大切であるが、独善に陥る危険がある。そこに対話の意味がある。対話を通して、自分の考えが偏っていないか、間違っていないかを確認していくことで、独善から抜け出すためには対話が重要になる。人間はポリスのな生物であり、社会の中で生きている。社会との整合をとるためにも、対話が重要になっていく。存在の建設は主体の願望から始まる。なりたい自分、ありたい自分を思い浮かべるような道徳の授業を目指してほしい。

第5回勉強会 令和6年2月8日(土) 参加者27人 (Zoomと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物教材「千年先のふるさとへ」(あかつき教育図書)を活用した存在の建設につながる授業づくり

【全体会及び協議会より】

○郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度について

→東京に住んでいると伝統行事や風習をあまり意識しないで生活しないことが多い。両親の出身地が都外であることも多く、地方の生徒と東京の生徒では郷土に関する思いの深さがちがっている面がある。地方は過疎化という問題に直面し、伝統行事を守ることができるかできないかの瀬戸際となっていることがあり、関西地方では独特の方言を地域のプライドとして大切にしているなど、地域の特色を大切にする文化が、郷土への意識に結びついていると考えられる。東京にも地域的な文化等について着目をさせながら、個人個人の郷土というものについて考えを深めさせていく必要がある。

○「千年先のふるさとへ」を考える視点

→東日本大震災から十年以上が経ち、震災を知らない生徒が中学生となっている。本教材については、震災を風化させないための努力を中学生が考えて実行する話であるが、実際には震災をしらない生徒が増えているように、風化が始まってきている部分があり、中学生たちの行動は果たして有意義なものなのだろうかという疑問は出てくる。千年先に日本があるのかも分からない。それでもその活動に意義を見出していくことにその生徒の生き方が表れている。過去から未来への考えをもたせていくことで、生徒の思いに迫っていききたい。

第6回勉強会 3月8日(土) 参加者18人 (ズームと対面によるハイブリット型勉強会)

【課題】 読み物教材「ロレンゾの友達」(小学校文部省道徳教育推進資料第3集)を活用した存在の建設につながる授業づくり

【講演及び協議会より】

○友情、信頼について

→友情というのは、相手と対等の関係性の中で生まれる愛である。より高みを追い求めていく

対象に対するエロスや無償の愛を贈るアガペーとは愛の関係性が異なることを理解する必要がある。信用は能力を信じること、信頼は相手の人間性への賭けである。信用は過去の実績の積み重ねであるが、信頼へ未来への賭けとも言える。信頼には裏切りが内包されていて、裏切られるかもしれないという可能性を引き受けて信頼することになる。友情は相手との対等の関係性だからこそ、裏切られる可能性を引き受ける信頼関係が成り立っていく。

○「ロレンゾの友達」を考える視点

→小学校でよく使われている教材であり、文部省の道徳教育推進資料集に掲載されているものであるが、内容についてよく吟味して使っていかなければならない教材である。ロレンゾが犯罪者であった場合、3人が話し合っている内容は、犯人隠匿につながる内容が話し合われており、法的に問題が生じる。また、友情を考える教材として取り上げられているが、3人の話し合われている内容は、果たして友情なのであるかということをしつかり考えなければならない。友情は相互に変わらない信頼があって成り立つものであり、相手に対する敬愛の念がその根底にあるということを考えてみても、この3人との関係には、敬愛の念があるのだろうかということも含めて考える必要がある。3者3様の行動について対話的に授業を行うことができたとしても、道徳的価値に対して深まりのある授業ができるとは言えないのではないか。

<令和6年度の勉強会を振り返って>

令和6年度は、**存在の建設につながる道徳科の授業を通じた道徳教育の指導方法**をテーマとして年間6回の勉強会を重ねてきた。第4回の勉強会では、横山道徳教育研究所と共催で、研究所のオープンセミナーとして実施した。普段の勉強会では、平均20人の先生方と勉強会を行っているが、100人を超える先生が全国各地から集まり、様々な意見交換を行い、横山先生の講演も十分な時間をとり、充実した勉強会を開催することができた。横山先生が3年ぶりに東京にお越しになるということもあり、本勉強会の設立当初のメンバーなども顔をそろえることができた。本勉強会も設立から15年以上経過し、令和7年度には通算100回の勉強会が開催できる見通しとなった。本勉強会で学んできた先生方の多くが東京都の道徳教育を牽引する立場として活躍しており、東京都の道徳教育の発展に大きく寄与してきたことを再認識することができた。

道徳が教科化されたことによる熱の高まりに対して、最近ではその熱はすっかり冷え切ってしまうている。働き方改革が叫ばれるようになり、ワークライフバランスが重要視されるようになり、本勉強会のように時間外に研修を深めていく勉強会に、これからの教育を担う次代の先生方の参加が少なくなってしまうている。教育の根幹を成すものが道徳教育であるということ踏まえ、若手の先生方が参加しやすい勉強会にしていく必要がある。

勉強会で学んできた内容は、道徳的価値に正対し、教材を通して道徳的価値について考えを深めていく方法について学びを深めていった。過去に取り扱った教材においても、読み進めていく中で解釈が変わり、授業の進め方が変わっていくことが、実践報告の中からも学ぶことができた。道徳の授業において、読み物教材の重要性は高い。映像教材とは異なり、文字の教材だからこそその良さがある。多様な考えに触れ、考えを深めることができる発問を工夫していけるよう、一層の研鑽を深めていきたい。